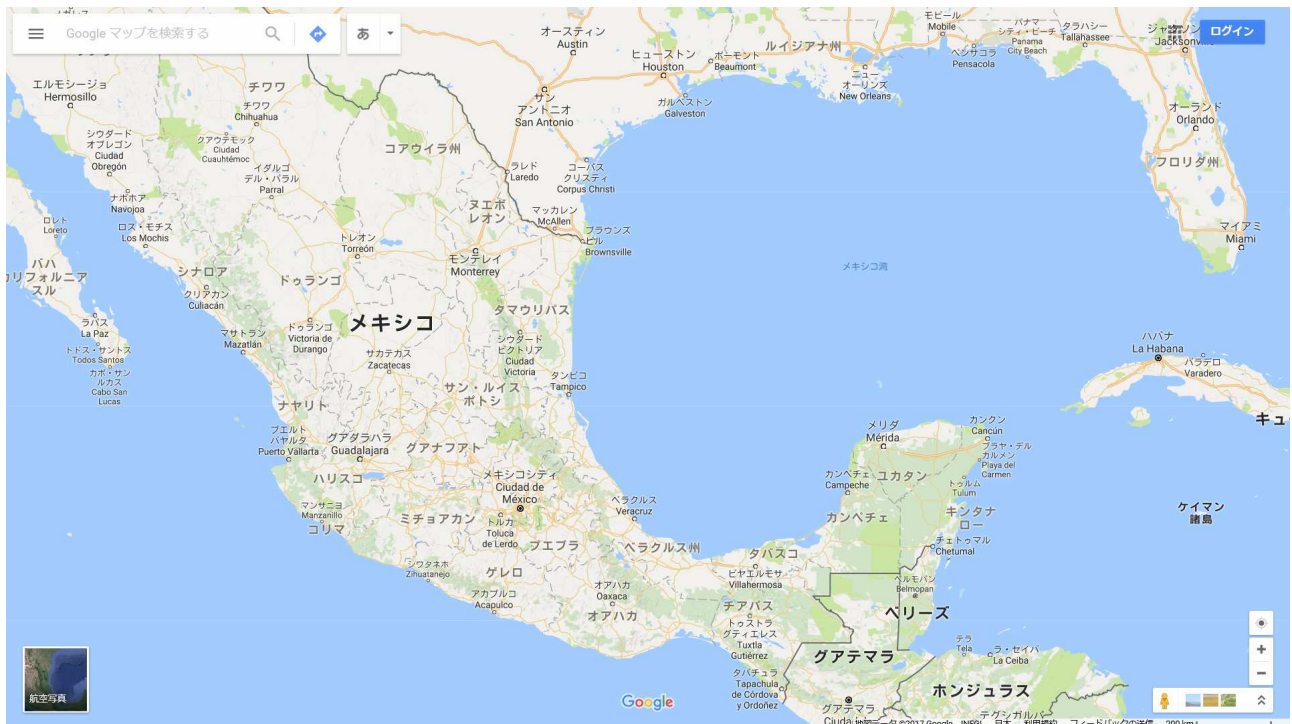


ユカタンの遺跡 Yucatan

メキシコ合衆国ユカタン州 人口 195 万人

地図 1 メキシコとユカタンの位置 首都のシティーは中央左下に、ユカタンは東側に突き出た半島



日本の 5 倍もの領土をもつ中米の大国、メキシコ。その東部、メキシコ湾に突き出た広大な平野の半島がある。ここはアメリカ先住民の中でも高度で特異な文明を築いたマヤ (Maya) 族の土地であり、石灰岩の台地を覆う緑の樹海の中に当時の栄光を偲ばせる遺跡が散在する亜熱帯の地である。1970 年代に NHK で放映された『未来への遺産』という番組で、この文明が醸 (かも) し出す悠久のイメージに魅せられた私は、いつかこのマヤの土地「ユカタン」へ行こうと思っていた。

メキシコへの旅

さて 89 年の夏の初め、旅行案内書を見てみると、さぞかし暑いと思っていたメキシコの 8 月 (私は暑さに弱い!) がさほどでもなく、暑さは 3 月から 6 月にピークを迎えていることに気がついた。これは旅行適地だと思い、早速旅行代理店でメキシコへの経由地、アメリカのロサンゼルスまでの往復航空券を購入。ついでメヒカーナ航空のロソーメキシコシティー—ユカタンの周遊券も手に入れた。こうしてお盆明けの 16 日、成田から旅立つことになった。

メキシコシティーとその周辺にも見るべきものは多く、ユカタンへ出発したのは 23 日の早朝だった。航空機は中央高原を横断。一旦メ

キシコ湾に出て、ユカタン半島をめざす。眼下が一面の群青色だと思ったら、いつの間にか陸地に戻り雲間から樹海の緑が見えるようになった。しだいに高度を下げた機は間もなくユカタンの州都メリダ (Mérida) の空港に着陸した。観光客向けに新築したらしいターミナルはこぎれいで、エアコンが効いていた。いつもと同様予約なしで来たので、「宿泊案内」に立ち寄り日程の都合もあったので、メリダの市街ではなくマヤの遺跡ウシュマル (Uxmal) に隣接するホテルを確保した。外に出るとうだるような暑さとぎらぎらした陽の光が襲って来た。ここは高原ではなく平野だ。用意して来た短いつばの帽子をかぶって、バス乗り場を探した。

バスの便は悪く、結局タクシーに乗ってメリダの市中に向かった。メリダは16世紀にスペイン人がマヤ族の征服をねらって築いた都市で、新大陸に典型的なコロニアル様式の碁盤目状の街路をもつ都市だ。都心を意味するソカロ(Zocaro)に降り立ち、街の散策もそこそこに、近くのバスターミナルに向かった。正午発のウシュマル経由カンペチェ(Campeche)行きのバスは予想通り満員で、現地の人と肩を触れ合いながら立ち続けた。1時間もすると、バスは熱帯の樹林を切り裂いた一条の道を走っていた。

ウシュマルのバス停を降り、看板に導かれて歩くと、まもなく右手に遺跡の入り口が見えた。その反対側に予約したホテル『ヴィラ・デ・アルケオロギア(Villa de Arqueología)』の建物が見えた。Club Med(地中海クラブ)が経営するこのホテルは、最近メキシコに展開しているらしく、中央高原の古代都市遺跡テオティワカン(Teotihuacán)の隣にも同様なホテルを見かけた。宿は洒落たプールを囲む口の字型の建物で、辺りの緑と溶け合い落ち着いた雰囲気の中にあつた。案内された部屋は独り者には贅沢なツインで、マヤ族の住まいをイメージしたインテリアだった。この部屋が5000円程で泊まれるのだ。日本円の強みを思い知った。しばしの午睡の後、ウシュマルの遺跡に足を踏み入れた。

ウシュマルの遺跡を歩く

空が薄雲におおわれ陽光も淡い夕刻、暑さも一段落した遺跡を散策した。先ずは入ってすぐにある『魔法使いのピラミッド(Pirámide del Adivino)』と呼ばれる神殿。ピラミッドはメキシコ古代文明に共通する建物で、一部の例外を除いてその役割はエジプトのような王の墓所ではなく神殿であり、その形は長方の四角錐なのだが、このピラミッドの形は四角の角が取れて柔和な楕円を描いている。この不思議な形が16世紀の後半、樹林の中に打ち捨てられたウシュマルを発見したスペイン人修道士の目に触れた時「魔法使い」の名を冠せられたのも、何

となく頷(うなず)ける。頭頂部にある五つの神殿には伝説上の多くの神秘が眠っているが、歳月と風水に寄る劣化のせいで急な石段の傷みが激しく登頂禁止で、残念ながらそれには触れられぬままになった。



写真1 魔法使いのピラミッド ウシュマル

そのすぐ西側に、『方形の尼僧院(Cuadrángulo las Monjes)』がある。四角い中庭を囲む四つの細長い建物になっており、南側の棟、東西の棟、北の棟と順に一段ずつ高い所に配された平屋は、隣のピラミッドとは対照的にそのシルエットを水平に伸ばしている。これらの建物は、ユカタン独特の表面を薄い石灰岩の板でおおうブーク様式で仕上げられている。そして壁面には、夥(おびただ)しい数の様々な神を表した意匠がほどこされていた。奇怪な人間の仮面を見せられているような雨神チャックのレリーフがひときわ目立つ。ユカタンは湿潤な土地ではあるが、大地が石灰岩でおおわれているため土壌の保水性が悪く、飲水の確保に窮した土地だった。そのため至る所にこのモチーフを見ることが出来る。それにしてもこの建物は何のために用いられたのだろうか。一説には、中庭に向かって開いている戸口は個々の店の入り口であり、『尼僧院』は地域の商業センターだったという。けれども、建物が段々に配置され最下段の南棟の中央にアーチ状の貫通路があることなど、儀礼的要素も強い。普段は裁判所などの公共の目的に利用されていたのでは、とされている。

南方へ200m近く歩くと、今度は高さ12m、一辺の長さ150m以上もある細長い基壇があり、



写真2 方形の尼僧院 ウシュマル

その上に『尼僧院』同様せいぜい二階屋ほどの高さで南北に長い建物が置かれていた。『総督の館(Palacio del Gobernador)』と呼ばれる建物で、西に寄っているため広いテラスを前面にもつ東側は、やはりプーク様式のレリーフに溢れていた。その用途は、往時の神官の住まいだったとも想像される。この館はマヤ文明の実質的な紹介者であるスティーヴンスとキャザーウッドが訪れた時、その仮の宿ともされた所だ。

ウシュマルが栄えたのは、10世紀から12世紀頃のことだ。その担い手が今もこの地に住むマヤ人だったことは周知の事実である。しかし新大陸にやって来たヨーロッパ人は、客観的な尺度を持たなかったせいか、これらの文明を彼らとどこかでつながった人々が築いたものと想像していた。ようやく19世紀の中頃に至って、アメリカ人の外交官スティーヴンズ(J. L. Stephens)とイギリス人の画家キャザーウッド(F. Catherwood)が南方のグアテマラから北上してこの地を訪れ、既知の文明と比べようがないマヤの独自の姿を紹介して、その評価が定まったという。彼らがこの地を訪ねた時、遺跡は緑の樹海の中に埋もれていた。その一番高い所にあり雨露を凌げるこの建物は、恰好のシェルターだったのだろう。

『総督の館』の東南に、ひときわ高いピラミッドが立っていた。その名も『大ピラミッド(Gran Pirámide)』と呼ばれる神殿で、草がはえ一部が崩れ落ちるなど、これまでの建物より古い8世紀頃の建造とされている。その急な階

段をよろけそうになりながら登る。頂上に出ると、360度視野が開けた。そのすべての方角が見渡す限りの樹海である。マヤの神官たちは天文・歴数に通じていたと言うが、地平線も見通せるこの場所での日の出と日没を見ていたら、必ずや天体の運行に思いめぐらしただろうと想像された。

ホテルでの一夜は、それまでの疲れとなれない食生活のせいで腹をこわしてしまい、グラス一杯のミルクを喉に入れただけで、呻く羽目になった。あいにく胃腸薬も持参していなかった。フロントまで出かけて薬を貰おうとすると、応対に出た女性の姿にいささか驚いた。日本での日常でいつも見る我々の同胞と何ら変わらぬ容貌をしている。1万キロの彼方に我々と同じモンゴロイドの仲間を見出した訳だ。マヤの人々は中米でも特に誇り高い民族として知られている。16世紀にスペイン人に征服されても尚彼らと混血せず、民族の血を保ってきたという。この女性も、その末裔なのだと思う。

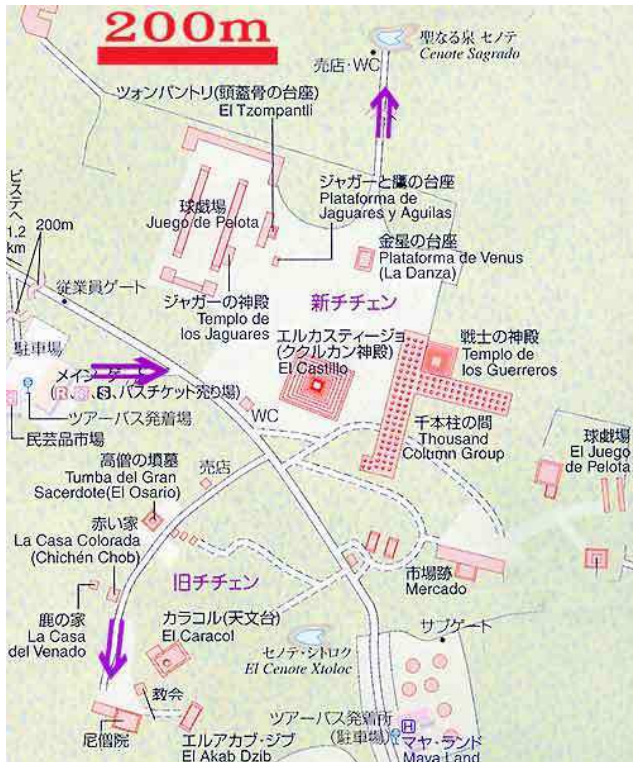
翌朝、晴れ上がって緑が眩しい遺跡の中をもう一度一巡した。照り付ける陽光は曇り日の昨日と違って、それらの建物の壁面をおおった神々のレリーフに陰影の変化を与えていた。宿に戻り身支度を整え、中庭のプールサイドでゆったりとくつろぐフランス人の幸せな様をちょっぴり羨ましく思いながら、ウシュマルを後にすることになった。

写真3 総督の館 ウシュマル



チチェン・イツァへ

メリダまでは、バスの代わりに各国の旅行者と一緒にワンボックスのタクシーに乗り合わ



地図2 チチェン・イツァ

せた。そこで再びバスに乗り換え、一路東方の遺跡、チチェン・イツァ (Chichen Itza) を目指した。乗り込んだバスは座れたとは言うものやはりすし詰め、途中から工場帰りらしい労働者の人達がさらに加わった。その重そうな荷を気の毒に思い、膝に置いてやったりした。バス停で待ち受ける物売りが茹でたとうもろこしを売っており、日本のとは違ってそれが真っ白なのに気づいたのもこの時だ。やがてその人達も降りると間もなくして、遺跡の手前にあるピステ (Pisté) の街についた。メリダから2時間半の距離だった。

もうすっかり暗くなったので、すぐ目の前の『ミシオン (Mision)』という名のホテルに宿をとった。ここもリゾートホテル然とした建物だったが、通された部屋はエアコンが効くものの中開け放っていたせいで、すぐに熱帯の蚊の攻めにあった。持参した蚊取りせんこうが有効だったのは言うまでもない。通りの向かいのレストランで、オムレツか何かとにかく消化の良いものを食べたのを覚えている。それから、遺跡で繰り広げられる「光と音のショー」を見よ

うと、田舎道をチチェン・イツァに向かった。途中で全く明かりのない所を歩き、往来の車のライトが無ければ危うく路肩に落ちる冷や冷やした経験もした。何とか入り口に着き、その晩は『カスティージョ (El Castillo)』と呼ばれる基壇上のピラミッドを背景とした、文字通り「光と音のショー」を堪能した。

翌日、陽の高くならぬうちに、このチチェン・イツァを歩いた。ここはウシュマルよりさらに大規模なマヤ族の宗教センターである。真ん中の位置にあるカスティージョは高さ30mと小ぶりだが、9層の基壇と四辺の中央に各々階段を備えた端正な建物である。この階段の数が91段で、四つを合わせると364段。頂上の1段を加えると365となり、正確な太陽暦をもっていたマヤ文明の一端を示すものとなっている。急な階段を上ると息が切れ、首は日に焼かれ汗が噴き出した。

マヤの神官たちがいかに優れた歴法に通じていたかは、南側の10世紀以前の遺跡群に足を向け、カラコル (かたつむりの意) と別称される『天文台 (Observatorio)』に登ってもよくわかる。高さ10mの基壇の上に立つ円筒形の建物は、南・南西・西の三方に四角く穿 (うが) たれており、奥からその縁を見通すと子午線や冬至、春分、夏至それぞれの日没の位置がわかるという。肉眼だけの観測で、精巧で複雑な歴を作ったその場が、ここにあったのだろう。



写真4 カラコル『天文台』 チチェン
マヤの人達も、古代メキシコ文明が共有する

犠牲供儀(ぎせいきょうぎ)の風習と無縁で無かった。チチェンの遺跡もそれに事欠かない。カスティージョの北数百mの樹林の中に、大地にぽっかりと穿たれた穴は、黄緑色の水を湛えておりセノーテ(Cenote=泉)と呼ばれている。ここは日照りの際にいけにえを投げ込んだ所である。19世紀末の米国人研究者トンプソン(E. H. Thompson)による浚渫作業で実際に男女の人骨が見つかった。深さ20mはあろう水面を見下ろす縁には柵もなく、覗くだけでも怖い場所だった。

一方、カスティージョと刈り込まれた芝生を挟んで向かい合う『戦士の神殿(Templo de los Guerreros)』には、メキシコ中央高原の古代アステカ文明にも通じるチャックモール像が置いてあった。天井が落ち壁と柱だけが残る神殿が立っている。その急な階段を基壇上へと上がる。像はあおむけのいけにえを支えやすいように中央を窪ませた格好で置かれていた。ここに立ち寄る頃には遺跡には多くの観光客が入り込んでおり、チャックモール像にも相次いで腰かけて見る人が来ていた。しかしここで行われていた儀式は、いけにえの生きた心臓を神官が石包丁でえぐり出し太陽神に捧げるそれだったから、悪い冗談の様にも思えた。



写真5 カスティージョとチャックモール像 チチェン

それにしても不思議なのは、西側の入口近くに戻った所にある『球戯場(Juego de Pelota)』で行われた宗教儀礼である。豊饒(ほうじょう)の神に祈りを捧げるその球技は、生ゴムのボー

ルを両側の壁から突き出ている石の輪にくぐらせて競われた。バスケットボールに近そうだが、手を使わず腰・足などで球を受けるのはサッカーのようでもある。数人のチームで競ったこの競技で、「勝者」の代表がその栄光を担っていけにえとして神に捧げられたという。マヤの人々にとって、死もまた歓喜であり苦痛とは無縁のものとされていたのだろうか。陽が高く草いきれのする球戯場の芝の上で、これらを表す壁画に見入りながら、そんなことを思ったりした。

滅亡したマヤ文明

マヤ文明は10世紀以降このユカタンに栄え、それもヨーロッパから白人がやって来た15世紀前半までには失われていたという。その理由としてしばし語られるのは、社会の上層に立った神官層とその他圧倒的多数の農民との間に分ち難い断絶が生まれたこと。神官達が操る複雑化した暦法がこれに関係しているのでは、という説だ。言わば同じ世界内でのコミュニケーションの断絶だ。その神聖文字が数字の部分を除き未解読のままの今日、確かなことを語るのは難しい。そしてその謎があるからこそ、今日も尚このユカタンの樹林に分け入り、人跡未踏の奥地に探査に入る研究者(日本人を含む)がいるのだと言う。

ユカタン最後の晩のその日、メリダの市中に宿をとって夜の街に出かけた。シエスタ(昼寝)の文化がある所は、どこでも宵っ張りだ。ソカロの近くの公園では、セレナータという歌謡ショーのようなイベントを今夜もやっていた。屈託なく人生を楽しむ人々。道路に向かって入り口が開け放たれたレストランで、卵入りのサラダを食べながら思ったものである。「本当に、この人たちが樹林の中の焼き畑耕作者だったマヤ人の末裔だと考えてよいのか」と・・・。

了